山本亡羊の門人簿について

遠藤正治

山本読書室は越中高岡出身の山本封山（一七四二―一八一三）によって天明六年（一七八六）に開かれ、亡羊（一七七八―一八五九）及びその五子一孫に受け継がれて明治末期に至るまで百十七年余連綿と続いた京都の代表的儒医・本草学の学塾であった。弘化四年京阪を訪れた帆足萬里は、

京摂学問、和学一向無人候、當時ハ山本本草、花岡外科京摂第一ト存候、雪雄ノ発句、梅逸、百穀の画是ニ次べく候、さてハ貞斎ノ醫術、緒方が蘭学などにや、其外ハ無人候、

と京摂の学芸の中で華岡青洲の外科とならび読書室の本草学を第一級に置いている。これは亡羊の門人でもある賀来飛霞に与えた書簡であるから若干割引かねばならないが、当時隆盛の極にあった俳諧や書画の道の上に置いているところなどは注目すべきで、関西において本草学がひときわ活況を呈していて、その中で読書室の影響が群を抜いていたこと、大衆的な広がりが存在していた状況を反映した評価と推察される。しかし幕末関西本草学流行の頂点にあった読書室については、その構造、性格や役割など充分解明されていない。とくに門人の研究が不可欠であるが残念ながら読書室の門人帖は見つかっていない。先年『読書室二〇〇年史』（山本読書室刊）をまとめるに際して読書室文書から推定した亡羊の門人簿作成を試みたが未発表に終った。その後調査を進めて若干の史料を入手し改訂増補し今回約五百八十名を収集することができたので、気付いたことを二、三を報告する。

その前に、「門人簿」の典拠であるが、亡羊の嗣子榕室（一八〇九―六四）の雑記帳『錫夫抄録』巻八に所載の「読書室開講宴出席姓名簿」と、同じく榕室の『日省簿』三巻によって五百四十余名を同定し、また『山本氏家譜』『読書室物産会目録』十二巻『亡算竊記』三十五巻及び『読書室蔵書画目録』等によって校合し四十名余を補った。

一、亡羊の六男章夫（一八二七―一九〇三）によれば、亡羊の門人は先進後進合せれば千数百人の多きに至るとい

う。亡羊の開講は文化八年（一八一一）、九名で授業を始めている。亡くなる安政六年（一八五九）までの四十九年間余に門人をとっていて、最盛時には年間四十数名入門しているから、単純に計算しても千数百人という数は無理ではなく、今回の五百八十余人は亡羊門人の約半数ということになろう。

二、入門者の出身地は北陸・東海以西、京都を中心に近畿・中国・四国・九州と関西全域に分布するが、地方の中ではとくに越中をはじめ北陸地方がとび抜けていて、先代からの地縁の影響を多分に受けていることを示している。諸藩の医師で藩主の命で寄宿したもの陸続跡が絶えなかったと伝えられるが、諸藩の中では筑後久留米藩からのまとまった入門が確認できる。宇治田元昌、古賀椿庵、実藤恭順、越野松園、宇治田隼衛らである。読書室が久留米出身の藤井懶斎の宅跡に建てられたという縁によるものであろうか。

また賀来飛霞、伊藤浚明等のように帆足萬里門下生の入学・交流も注目すべき一面である。

三、亡羊の本草学は小野蘭山直系であるから、父祖また

は近親が蘭山門人という場合が多く、蘭山の影響が色濃く出ている。百々三郎、物部宣太郎、村松保一郎、山本安暢、賀来飛霞などがその例で、江馬活堂や平田景順などの場合のように蘭山門人の弟子が移入した例も多分にみられる。

四、京都の塾という性格から、典医との関係も深く、典薬寮医師の過半が門人であったと伝えられるが、典医の中では三角家、百々家、福井家、賀川家、浅井家などの子弟の数代にわたる入門が確かめられる。中でも賀川家の場合は交際が緊密のようで「読書室開講宴出席姓名簿」には上総大椽（満崇）の名が二十四年以上も記されていて、読書室の幹事だったと推察される。

五、本草学を教授していたため、儒医系列以外に蘭方系の人も入門している。また後に蘭方に転学した場合もみられる。前者の例としては藤田長禎、江馬活堂などがあり、後者には小嶋碩平、宇治田隼衛、田路鼎斎などの場合がある。また、土田乙三郎（英章）は嘉永元年（一八四八）読書室物産会に「微虫図」（銅版画）と顕微鏡を出品している。「微虫図」は耐熱性の細菌芽胞の世界最初の観察記録

ではないかと言われている。

亡羊の学問は決して新しくなかったが、新旧の多彩な人材を養成し、幕末の転換期に一定の対応をみせている。さらに門人の分析を進めて、つっ込んだ再評価をしたい。

（大垣工業高校）

石川玄常について

津田進三

「解体新書」の刊行は、ひとり日本の医学史のみではなく、文化史全体の上からみても画期的な出来事であった。そしてこの解体新書の本文各巻のはじめには、いずれも

「　　若狭　杉田玄白　翼　訳
日本　同藩　中川淳庵　鱗　校
　　東都　石川玄常　世通　参
　　官医東都　桂川甫周　世民　閲」

と、四人の名前が連記されているが、このいわば著者グループのうち石川玄常についてのみは、何故か「蘭学事始」にその名が全く記されていない。そのためか石川玄常は他の三人にくらべて余り知られておらず、その研究も少ないようであって、従来太田錦城撰の墓誌銘（呉秀三「中外医事新報」昭和四年、岩崎克己「掃苔」昭和一五年）が殆んど唯一の資料とされているので、そのほか現在までに知り得たこ